

## 主の祭り

青の月。鏡の中のアトウナの口角は、珍しく上がっていた。癖の強い赤髪も、いつもより上で縛ってある。左右それぞれの角度から確認するたび、炎色の髪は楽し気にはねた。

木のうる型の窓は、青の月特有の、強烈な日光に焼かれている。耳をすませば聞こえるはずだ。村で奏でられている、主の祭りの音楽が。

「アトウナ、先に行くわよ！」

部屋の外で声がする。アリアだ。彼女は、アトウナが返事をする前に、軽快な足音をたてて去った。これもめつたにないこと。主の祭りは、日常をすっかり変える。

アトウナは、服の皺をのぼし、藍のルドラについた赤毛を取った。

「エラドルス、あんたも行こう！ ウェイコレンが売り切れる」

彼女は、床を走り回る小さな竜に両手を伸ばした。ウェイコレンは、練り飴に木の実を混ぜた、祭事限定の菓子だ。毎年欠かさず食べているが、あれがないう主の祭りは、緩んだ靴下を一年中履くようなもの。困りはしないけど、すごく気持ち悪い。

エラドルスは、青い翼を広げて、主人の背中に飛び乗った。重さで傾いたが、アトウナは持ちこたえた。普段は文句を言うところだが、今日は笑いがこみあげる。

「アリア、待って！」

アトウナは肩掛け鞆をつかむと、竜を背負ったまま、部屋を飛び出した。

そこへノウアが通り過ぎ、彼女はみごとに、師の肩へ鼻をぶつけた。

「老人を吹っ飛ばすつもりか？」

ノウアは手紙の束を抱えており、そこから何通か零れ落ちた。「拾っておくれ、せつかちさん」

「ノウア、ノウア。アリイアが先に行っちゃった。ノウアは行かないの？」アートウナは、さつさと拾い上げて、手紙の山の上に積んだ。

「今日は、あんたたち二人で行っておいで。あたしはこれを片付けなきゃ」

アートウナは、素早く手紙の山を眺めた。違う。師が片づけなくてはいけないのは、これだけではない。〈見えない死〉と深<sup>モッペ</sup>の術<sup>ター</sup>もだ。ノウアがその話をしたのは、綿虫の月だった。アートウナは、寒気がしたことを覚えている。自分たち以外に、敵意をもつ有魔力者が潜んでいるというのは、実際のところ、主の祭りを楽しんでいる場合ではない。しかし、ノウアは頑として、弟子たちに仕事をすることを許さなかった。

「そうだ、これをやる」

ノウアは、手紙をいったんアートウナに押し付けると、隠しからなにかを取り出した。

「アリイアと、何か食いもんでも買ってきた」

アートウナは飛び上がってミル硬貨を受け取り、師に抱き着いた。エラドルスの翼が顔に当たりかけ、ノウアは慌てて竜を押しつけた。

「主の舞は、絶対に来てよ？」

「ハクウガシへの手紙が書き終わったらな。間に合わせる」

「ハクウガシ？ アスハリエイク国の魔法使いと、また文通してるの？」

「お節介なじじいを友人に持つと、とても面倒なんだよ。気をつけな」

アートウナは笑い、階段を一段抜かしで下りた。エラドルスが飛行しながら横を通り過ぎる。彼は翼をすばませ、魔導師の木の中を螺旋状に降下した。ア

ートウナは、最後の三段を飛び降ると、扉から勢いよく外へ出た。

弟子を見送ったノウアは、ほっとして自室へ上がった。彼女たちは一か月前、

〈天守り〉<sup>グロナーシュ</sup>の避難所を完成させた。他の仕事の合間を縫い、一か月半かけて、

ようやくマノから〈天守り〉<sup>グロナーシュ</sup>を引き出したのだ。

（二人には、少し息抜きを与えないと）

ノウアは、手紙の山を机に広げた。<sup>アーナラミ</sup>秘庭書庫にこもっているあいだに来てい

たものだ。<sup>アーナラミ</sup>秘庭書庫は、時の感覚を狂わせた。ノウアは、もう何年も魔導師の木を忘れていたような気がしたし、弟子たちが急に大人びて見えるように思えた。前にここへ来たのは、果たしていつのことだったのか、見当もつかない。

こういった気の狂いは、自分一人で終わりにさせたい。二人には、もったこの世界を楽しんでほしい、ノウアは思った。他者の希望、願い、立場に埋もれ、誰かのために生きてはいけない。あの紫の瞳たちは、自ら輝き続けてこそ意味があるのだ。

ノウアの手で、手紙は右へ左へと分別されはじめた。

アリイアは、すでに魔導師の木の丘を半分ほど下っていた。アートウナは、彼女のもとへ矢のように駆けだした。エラドルスが低空飛行しながら滑っていく。

《カーリクルシイア（変化）！》

誰も見ていないのをいいことに、<sup>アウシエヌン</sup>アートウナが実言葉を舌の上で転がすと、

エラドルスは暗雲のように広がり、丘を影で支配した。彼は咆哮し、地面と大気を揺さぶった。

巨大化した竜の大音声に、アリアが振り返った。驚く彼女にアトウナは気分がよくなって、アベドの腕ほどある竜の指に、手をひっかけてぶら下がった。地面が川のように過ぎていく。歓声を上げる口に、羽虫が入った。

「へえ、いつのまにそんなことが」

エラドルスが側に着地すると、アリアは目を丸くして言った。彼女の使い魔のシャーナは、振動する地面で足を踏ん張った。

「口の中で虫が死んだ」アトウナは、唾を吐き出した。

「エラドルスは、すすんで虫を食べにいつているようだけど」

アトウナは、ぎょつとして振り返った。巨大な竜の姿は消え、かわりに、白い蝶を追う小さな竜がいた。飛び上がっては、蝶に噛みつかうとしている。

「エラドルス、勝手に元に戻らないでよ！」

アリアは、けらけら笑った。

「使い魔の利用方法が一つ増えたわね。『見習い魔導師アトウナの害虫駆除店』を開いたらどうかしら。依頼殺到間違いなしよ」

アリアが言うや、火の粉が飛んできた。彼女はとっさに実言葉アウシエスムンを呟き、風を身にまとった。旋風は、火の粉を虚しく消し飛ばした。

「あと少しだったのに」火の粉を放ったアトウナは、地団太を踏んだ。

今日はやけに魔法を使う、アリアは微笑みながら、冷静に年下の魔導師を観察した。主の祭りだからだろうか。すべてのアベドが責任から解放される、日常から切り取られたこの空気。これが彼女を身軽にさせているのだろうか。そして自分も。

「分かった、悪かったわよ。さ、早くウェイコレンを食べにいきましょ」

「奢ってよっ」

歩き出したアリイアを、アートのウナは慌てて追った。ノウアから貰ったミル硬貨が隠しで鳴ったが、アートのウナは、これを二人で使う気になれなかった。小馬鹿にされた腹いせに、アリイアにお金を払ってもらいたい。

アリイアは、必死に強がる小さな魔導師に、心の中で苦笑した。

「じゃあ、三番勝負しましょ。まず、どっちが多く歴代の魔導師の名前を言えるか」

「それよりも、どっちが早く丘を下れるかにしようよ！」

「私とシャーナも飛べるわよ。それでもいいの？」

「飛んでいる使い魔に、掴まって下るんだよ。アリイア、できないでしょ？」

「そんな危ないこと、まずしないわよ」

「できないんだ、できないんだ！」

アリイアは、眉を上げた。そして、にやにや笑うと、駆けだした。

「シャーナ、《カーリクルシイア（変化）》！」

アウシエヌムン

アリイアは使い魔に実言葉を投げた。並走していたシャーナは飛びあがるや、宙で飴細工のように体を伸ばした。煌びやかな紫の鱗、背には一筋の鬚が生え、前脚は上品に胸元で折りたたまれる。果てしなく離れた後ろ脚は、風を力強く蹴り、猫竜は太い腕を伸ばして、主人を抱いた。アリイアの笑い声が丘に響く。

アウシエヌムン

アートのウナは、急いでエラドルスと呼び、変化の実言葉をもう一度かけた。

「ひどい、先駆けなんて！」

こちらに向かって蝶を追いかけていたエラドルスは、蝶を口に入れた瞬間、大きくなり、アートのウナの頭上を飛んだ。アートのウナは、走って両手を伸ばし、彼の手に掴まった。ざらりとした鱗の感触が、少しだけ手を痛める。

見る間に足先が地面から離れていく。アベドの手ほどの高さから、アベドの背の高さへと……。生ぬるい風が、髪の間をすり抜ける。日の匂い、土の匂い、草の匂い、そして羽ばたく度に香る、竜の被膜の匂い。それは、饅えた汗に、独特な甘さと、火の香りが混じっていた。

アートウナは、今度は虫を食べないよう、口を閉じて飛行した。しかし、口角が上がるのを抑えることはできなかった。

使い魔を飛ばす二人は、商の村に同着した。祭り期間中は、各村でそれぞれの催事が行われているが、一番の規模を誇るのが商の村だ。エイネーの玄関口と言われるだけあり、入国者も多く、彼らに向けてエイネーの文化や技術力を見せるため、その熱気は他村と比べ物にならなかった。

使い魔を足元に控えさせ、村の門をくぐると、真っ赤に染まった装飾に目を奪われた。商の人の象徴である赤い結び目が、飾り紐となつて、街灯や窓枠にかけられている。それは、血脈のように広がり、深部へといざなっていた。その通りを、様々な仕事人たちが行き交い、ものすごい熱量を生み出している。食べ物の匂い、呼び子の声、アベドたちの笑い、音楽、物、物、物。

通りに構える店には、主の祭りの装飾として、王家の紋を模ったひし形の飾りが置かれている。硝子の置物、金属製の掛け物、木製の看板などで、それらは王家への忠誠と畏敬の念、そして守護の祈念がこめられていた。

「さあ、ご覧あれ！ 月の護符が百二十ミル！ ふたつで二百ミル！」

「正午きっかり、舞台『アケラスと星迫い人』を、キーログ丘にて行います！ 立ち見可能、笑いあり、涙あり。ぜひお越しください！」

「パカリ（薄く焼いた生地に、砂糖漬けた木の実と餅を挟んだ菓子）が八十里だよ。ただいま作りたて、売り切れ御免！」

呼び子に惑わされそうになるが、アトウナはウェイコレンを探した。しかし、探されていたのは自分たちだと気づいたときには、身動きが取れなくなっていた。

「やあ、魔導師様だ！」

「どこに、どこに？」

「アリア様、アトウナ様！」

「よくいらつしやいました！」

「わが村を楽しんでいってくださいませ！」

「ぜひ、獣の村にも！」

「よき日になることを」

「どうぞ、我が店に立ち寄って……」

誰も彼もが、魔導師に触れようと手を伸ばす。アリアとアトウナは、手を振ることで、その声に応え、ゆつくりと歩みを進めた。アトウナは、笑顔を保ったが、心の中で目を回した。小さな頃は多くの目に囲まれても、なににも思わなかった。祝福されている気にもなっていた。だが、今は違う。様々な形の手も、言葉も、自分からなにかを奪おうとしているような気がしてならない。

「何をお探しになっているんですか？」

年を取ったアベドが、きよろきよろしているアトウナを見かねて、声をかけた。

「え、ああ、ウェイコレンを……」

「それなら、あそこの、フコルがやってる店がいいですよ！ コクのある砂糖を使ってるんでねえ。質が良くて、実にうまいんですわ」

「あっちの『風見が咲』という店のものが、断然いいですよ！」

反対側から、太った女アベドが、別の方向を指さして言った。「エサルノア様もお召し上がりになり、美味しいとのお言葉をいただいたものなんです。舌触りが滑らかで、それはそれは美味しいと評判なのですよ！」

エラドルスが、アベドの数に圧倒され、背中に這い上る。彼は、長い鎌首をのばして、アベドに向かって噛みつくふりをした。そのたびに、取り巻きたちから感嘆と恐れのだよめきが上がり、アトウナは冷や汗をかいて、竜の口を掴んだ。

「離れたほうがいいです。この子、好奇心旺盛なので。特に、アベドの鼻が好きで！」

アトウナは苦笑いして言った。アベドたちは慄き、完全に彼女から離れた。アリアとシャーナが、落ち着いた目で自分たちを見ているのを視界の端とらえる。あたしとエラドルスは問題児に見えるだろうか？　なぜこうも、他者に牙をむいてしまうのだろう。

いろいろな店をまわったかったが、結局アトウナは、近くにあった定評のある店で、ウェイコレンを求めた。

入店すると、店員の商の女二人は口をぱくぱくさせた。「あたし、夢を見ているんじゃない？　頬をつねってよ、……痛っ！」「夢じゃないわ。ねえ、アリア様も来てくださらないかしら？」「まじないか何かかけてもらうんだったわ」「魔法も見せてもらえばよかった」彼女たちは、アトウナの去り際、そう呟いた。

アトウナは、来年は見習いに変装して祭りに行くことを考えた。ウェイコレンを抱え、通りに出ると、待っているはずのアリアがいなかった。

アリアは、菓子屋の先にある服飾品店で、アベドたちに囲まれていた。

「魔導師アリア様！」

アベドたちは、恍惚となってアリアの名前を叫んでいる。アトウナも、そんな彼らの間に体をねじ込みこみながら、彼女を呼んだ。「アリア！ ……アリア！」

アリアは、一枚の布を手にながら、笑って集団に手を振っていた。服飾品店の女将が、ひっきりなしに彼女に話しかけている。何を言っているのかは、ここからではわからない。

「アリア！」

ようやく、周りのアベドたちが、もがいている小さなアトウナに気づいた。

「おお、アトウナ様だ！」

道がようやくけはじめた。エラドルスが肩に上り、その硬い鱗と翼、耳障りな叫び声で、アベドたちをさらに退ける。

「ああ、アトウナ！」

アリアがやっと気づいた。彼女は、アトウナの手を引っ張り、集団から抜け出すのを手伝った。

「アトウナ様！ アトウナ様！」

「お二方が揃ったあ！」

「ありがとう、この生地を買うのは、また今度にするわ」

盛り上がる集団の声の中、アリアは女将に言った。そして、もはや進むことができないほどアベドに囲まれたのを目にすると、彼らに言った。

「私たちは、これから広場の円舞を観にいきます！ どこか、いい場所はありませんか？」

みんな、「もちろんありますよ！」と言って、我先にと広場の方へ動いた。アリアとアトウナは、そろそろとアベドを引き連れ、ついていった。彼ら

は減るどころか、ますます増えていた。

「あなたのエラドルスは、いい護衛をしてくれているわね」

アリエアが耳打ちする。エラドルスは、魔導師の周りを、アベドの顔の高さでくるくる飛んでいる。興味本位で手を伸ばすアベドを、エラドルスはさつとよけ、ときに雄たけびを上げた。アベドたちは喜んだ。まるで一種の見世物のよう。けれど、エラドルスはただ単に興奮しているだけだった。

広場に着くと、つくりの人の〈踊り手〉が、すでに舞いをはじめていた。肩に飾り紐をたっぷりとつけ、足首の鈴が、着地するたびに涼やかに鳴る。腰布が風を含んでふわり膨らみ、木笛と五本線の弦楽器が、彼らの足を急がせた。観衆たちは体を揺らし、合いの手を入れていた。

魔導師のために、アベドたちは、踊りが正面から見える場所へ案内した。すでにそこにいたアベドたちは、水のようにはけ、魔導師たちが入っていくと、輪を閉じた。

魔導師が優先的な扱いを受けることは、相応の仕事を請けているからであり、アトウナもそれに慣れ切っていた。しかし、眉をひそめてから、諦めた顔で去っていく見習いを見ると、ぞっとするのだ。

「浮かない顔じゃない」

シャーナを抱えてアリエアが小声で言う。「彼らは平気よ。仲間がいる。また別の楽しみを知っている」

「どこかで恨みを買っているんじゃないかと思って」

アリエアは、癖のある赤毛を柔らかな目で見下ろした。

「全員を満足へ導くことは不可能だわ。世界はクウェクト石のように平滑ではないからね。恨みを買われることはもちろん避けられないけれど、誠実な仕事をし続ければ、均衡は保たれるわ」

「それってどういう意味？」

「マノを救った私たちは、ウェイコレンを笑って食べていいという意味」

アリイアは、包みを覗き込んだ。「五つもあるじゃない。一つちようだい」

「待って！ 全部違う味なの。あたしが一個食べてからにして」

「それを買ったお金はノウアのものでしょうか？ ノウアは『アリイアにも』って言ったんじゃない？」

アートウナは、慌てて一つを齧った。ねっとり柔らかい練り飴が前歯をとらえ、舌をごろごろ木の実が転がる。乾燥葡萄とナルウ莓だ。甘味が口の中を満たし、アートウナは、自然と笑顔になった。アリイアも一つを手にとった。

「あの競争の賭けは、まだ終わってないから。引き分けだったでしょ。今度は、ペニヤツツ酒十本ね！」アートウナは言った。

「はいはい、素敵ね」

軽快に太鼓が鳴り、曲調が変わった。弦楽器奏者が舞い出て、〈踊り手〉たちは両手を広げ、優美に広場全体を移動していく。すると、一人の男の〈踊り手〉が魔導師たちを踊りに誘った。周りから歓声上がる。アートウナは退いた。

すると、アリイアが、食べている口を抑えながら、さっと誘いに応じ、踊りの輪の中に入った。歓声が一とき大きく上がった。

アリイアは、踊り手の男に合わせて踊り、短く地面を踏んで、優雅に舞って見せた。

「魔導師アートウナ様、イペラ（芋と山菜を練って生地包んだ揚げ物）はいかがですか？」

アートウナの横から、ふっくら肥えたつくりの女が皿を差し出した。お行儀よく整列した四角いイペラがのっている。イペラは、祭りの日の軽食だ。香ば

しい油の匂いに、唾が湧く。

「……いただきます。ありがとう」

アートウナがイペラを取ると、女は、誇らしげな笑みを浮かべ、魔導師に礼を示し、去っていった。

アートウナは、アリアアを見つめた。アリアアは、つくりの人と混じって、楽しそうに踊っていた。観衆たちも、手を叩いて喜んでいる。

この輪の中では、魔導師とアベドに境はなかった。彼らは現在を踏み、汗を流して、音楽に身をゆだねていた。〈見えない死〉も深の術も、モッペイアここでは存在できない。楽観的な微笑みは、現実を思えば愚かに映るのかもしれない。けれど、鮮やかな足さばきや、流れる装飾の色彩は、燃え続けようと足掻く、残された火のようだった。

アートウナは、二個目のウェイコレンを齧った。宙を飛んでいたエラドルスが、両肩に乘しかかって、ウェイコレンを嗅ぐ。彼は主人と分け合うと、鼻から熱い煙を吹き上げた。

## ◆二日目

獣の村の宿の前で、イムサが怒鳴った。

「クワーレン、行くぞ！」彼は、ペニヤツツ酒の瓶が入った箱を抱え直した。

クワーレンは、それを二階から降りる階段の途中で聞いた。彼は別の箱を抱えていた。

一日前から、クワールレンたちは、岩羊競争の開催に伴い、会場近くの獣の村で一泊していた。選手と、その同じ番地の見習いは無償宿泊が可能とされており、クワールレンたちは、これ幸いとチャルーにくつついて来ていた。

だが、今日のイムサは、チャルーに負けず、間違いなく気分が上がっていた。興奮しているのを隠そうと、偉そうにしているのがわかる。きっと、自分でもわかっているんだろう。それで余計恥ずかしく思い、なおさら上ずった声で話すのだ。

「いま行くよ」

クワールレンが答えて、一階に降り立った途端、目の前をチャルーが火のごとく横切った。

「お、なんだそれ！」

便所に行こうとしていたチャルーは、戻って箱を覗いた。チャルーは、両手に籠手をはめ、膝にも防具を付け、腕や足には、傷を防ぐために、布帯を巻いていた。岩羊競争の選手着だ。胴着は北熊ノールの白色で塗られ、胸には咆哮する北熊ノールの横顔が描かれている。

勇ましいといえば勇ましい。だが、彼は少し小柄だった。胴着には衝撃を和らげるための綿が詰まっているが、そこから出る腕や足は細く、まるで貧弱な亀にみえた。だが、闘志に燃えて鼻息荒くする彼に、そんなことは言えないと、3015番地の仲間たちはわかっていた。自分たちだって、チャルーの勇姿を見届けたかったのだ。

「君が競争をしている間に、ペニヤッツ酒を販売するんだよ」クワールレンは、さっきの問いに答えた。「これは、特製のホルト」

「この絵、お前が描いたの？」チャルーは、灰色の線が流れるホルトを一つ取った。

「そうだよ」

「どこで売るんだ？」

「観客席」

チャルーは、ほっと眉を下げた。「じゃあ、俺の走りも見られるな！」

「クワーレン、オクルが来たぞ！」玄関から、イムサが顔を覗かせた。

オクルは、荷車を押して来ていた。彼の番地にも選手がおり、同じ宿に泊まっていたのだ。彼らには、『なかよしお日様味』を見習い村から運び出す手伝いをしてもらった。道具を分散させて、各自、鳥便に乗る際に持ってきたのだ。そして、宿から会場までは、クワーレンたち三人で運搬することになっていた。オクルは、獣の村で荷車を調達できるだろうと踏んでいたからだ。そして、彼はその通り、荷車を持ってきた。

「よお、よく借りられたな！」

イムサが手を振ってオクルに声をかけると、彼も手を振り返し、後ろを向いた。空の荷馬車が、オクルに付き従うようにやってくる。

「やあ、おはよう！ 会場までこのおじさんが乗せてくれるってさ」到着するなり、オクルは言った。「ありがとう、グーマーさん」

「よかった、二回もおじさんって呼ばれなくてよ」

グーマーと呼ばれた御者は、その赤ら顔と尻とを順番に搔いた。そこへ、いつの間に用と足し終えたチャルーが、裾をルダラにたくし込みながら、「もう他の選手、行っちゃったか？」と訊ねた。「知らねえな」とイムサが答える。

「あ、お前ら！」

グーマーは、なにかを思い出したように、まじまじとチャルーとクワーレンを見た。

「お前ら、俺はよく覚えているぞ。3015番地に文句を言っていた二人だ

な。間違いいねえ。宴がない、とか言っていたやつらだ」

クワーレンとチャルーは、ぎよっとして顔を見合わせた。

「俺はグーマーだ。新見習いを家へと運ぶ御者。運んだやつらのことなら、一年以内なら覚えている」

赤ら顔の御者は、歪んだ笑みを浮かべて、親指で額をこつこつ叩いた。クワーレンも、ようやく思い出した。シルレイヤの森を最初に話してくれたのは、彼だった。

「まさか、また会えるなんて！」クワーレンは彼に近づいた。

「ああ、珍しいこともあるもんだ。だが、荷車だけで会場に行こうだなんて、無茶な話だぜ？ 道具が全部入りきらないだろう。俺がいなかったら、いったいどうするつもりだったんだ」

グーマーは偉そうに鼻を鳴らした。オクルがそれに答える。

「もちろん、荷馬車をつかまえるつもりでしたよ。荷車だけじゃ無理だろうっていう御者のね。荷車は、販売のときに使うんです」

グーマーはもぐもぐ口を動かし、言葉を詰まらせた。「……お前、少し黙ってろ」

その間、オクルはさっさと荷台への積み込みを完了させた。イムサ、クワーレンは、荷物の間に体をねじ込ませ、乗車した。

「俺もついでに！」

チャルーがグーマーに言った。御者は親指で荷台を示し、頷く。チャルーは、猫のように身軽に飛び乗った。最後にオクルが乗った。

「マウリンたちは？」

チャルーが慌てた様子で宿を振りかえった。「あいつら、ちゃんと来るだろうな？」

「ウェイコレンを買いに行っていたよ」クワーレンは、尻にあった小枝を取って放り投げた。

「どうして心配する？ そんなに自分のことを見てほしいのか？」オクルが笑った。

「俺たちとこいつには掟があるのさ。試合中は必ずこいつを見ることって、無理やり誓わされたんだ」イムサはチャルーを突き刺すように指さした。

チャルーが反論する前に、オクルが手を叩いた。

「いい掟だな。破らないお前も、いいやつだ！」

「お前、少し黙ってろ」イムサは彼を肘で小突いた。

「さあ、いいか？ 出発するぞ！」

グーマーは口笛を吹いた。エイナー馬は歩き出し、馬車はゆつくりと進んだ。ホルトや酒瓶がかちやかちや揺れる。見習いたちは荷物を抑えるように腕を広げた。

会場へ着くなり、チャルーは荷台から飛び降りた。「俺、練習しに行くから！」彼を見送りながら、オクルは荷台から一本の酒瓶を取り出した。

「送ってくれてありがとう。これ、お礼です」

受け取ったグーマーは、酒瓶の首を持って、左右に振った。

「お前ら、これに何か仕込んでいるのか？」

オクルは目を見開いた。

「まさか。安全そのものですよ」

グーマーは、彼の目を見つめながら、ぐいっと一口煽った。それから、真っ赤な頬を盛り上げて、笑みを作った。「うん、報酬に見合った味だ。猫の小便より全然いい」

「飲んだことが？」

「職業柄、いろんな見習いに会うもんでね」

クワーレンとイムサはその間に、備品を荷車に積んだ。荷車はイムサが引き、クワーレンは、箱に紐を通して肩に掛けられるようにした、特製販売箱を装着した。箱にホルトを入れ、ペニヤツツ酒を注いで販売するのだ。これは、クワーレンの作った自信作だった。

グーマーに別れを告げると、三人は会場へ向かった。

会場は、二重砦と呼ばれていた。方形の建物で、屋根はなく、高さはゆうにアベド十五人分はある。かつて屋根を支えていた石柱が上階に並んでおり、その下に、正方形の飾り穴が開いていた。

周囲には雑木林が広がっており、その中に天幕があちこちに張られていた。見習いや仕事人たちが、それぞれの天幕の下で最終準備を行っている。防具が当たる音やむさくるしい熱気が、木々の隙間を満たし、まるで一つの獣の群れのようなだった。

「欲しいのはお客による宣伝だ。ここで売っても、叫び声に変わるだけだろう。競技場でさっさと売りさばこう」

オクルが言い、三人は入り口へ向かった。

入り口には、すでに多くのアベドたちが群がっていた。

「さあ、まもなくはじまるよ！ さっさと入った入った！」

入り口に立つ男が、手を振ってアベドたちを急かしている。岩羊の角を模した兜をかぶり、安っぽい籠手と胴着までつける彼の足元には、毛の長い猿が座っていた。檸檬色の顔に白毛を靡かせるその猿は、見習いを見つけると、憑りつかれたように凝視した。

「それはなんだ？」

クワーレンたちが近づくと、兜の男は言った。長く厚い髭を、ほじくるよう

にして撫でる。

「飲み物の販売です。観戦には欠かせないでしょ？」オクルは、軽く手を振って荷車を示した。

「そんな許可は出していない。帰りな」

「北熊<sup>ノール</sup>学舎の認可証を取っています。販売は可能なはずですよ」

オクルは、いつのまに取得した認可証を隠しから取り出した。しかし、男は見向きもせず、同じ背丈のオクルを睨みつけた。

「見習いは信用できないと言っているんだ。ここではだめだ。よそでやれ」

「去年は、南鶴<sup>ナウク</sup>学舎の見習いがパカリを、西穴<sup>ラシヤ</sup>熊学舎の見習いがポウを販売しましたよね？ 岩羊競争実行委員に聞きましたが、規約は改訂されていないとのことでした。でしたら、今年、僕らの販売が不可になる理由は、ないように思います」

「お前、年齢を詐称しているだろ。相棒も警戒している。詐欺師に販売を許可すると思っているのか」

クワーレンは笑いを噛み殺そうと、必死に頬の内側の肉を噛んだ。

「僕、本当に見習い一年ですよ」とオクル。

「見習いは信用できないと言っているんだ」

堂々巡りに、クワーレンはおかしくてたまらなかった。しかし、イムサはこめかみの血管を浮き上がらせていた。

それに気づいたオクルは、さっと彼の肩を掴んで下がらせた。イムサは怒りの顔を向けたが、オクルはわずかに首を振った。

「じゃ、いいです。俺たち、別のところに行くから。行こうぜ」

彼は言うのと、来た道を引き返した。イムサは歯ぎしりしたが、無言で彼に従

った。クワーレンは、男を振り返った。「さあ、詐欺師以外は、入った入った！もうじき始まるぞ！見逃しても知らねえぞ！」彼は、片手で客を促し、もう片方で見習いを追い払う仕草をした。

「あいつに一杯飲ませて、わからせてやればよかったのに」荷車をがたがたいわせながら、イムサはオクルに齒を剥いた。

オクルは大股で歩き続ける。

「まあ、あんなやつのために一杯を無駄にすることはないさ。それに、彼は飲んだところで態度を変えないだろう。こっちはもう、グーマーに一本あげちゃったんだから。商品はよく考えて使わないと。さて、もちろん、試合には間に合うようにしなくちゃ。……こうなれば、裏口を探そう」

オクルが言い、彼らは駆けだした。選手がいなくなった天幕をいくつも通り過ぎ、茂みを抜け、二重砦沿いに走る。

湿り気のある土が、靴をとらえる。長らく影に潜んでいた葉たちが重い冷気を運んできた。

先頭を走るオクルの見習い服は深緑の暗がりですべて灰色に染まった。イムサは後方で、引かかる土くれにうんざりしながら荷車を飛ばしている。

オクルが立ち止まったのは、ツタの壁だった。クワーレンは鳥肌が立った。

同じように、ツタの葉も冷気によって一斉になびいた。そんな葉を、オクルは探るように触れていく。

「ついに、いかれちゃった」イムサが息を切らして言った。

それを遮るように、オクルの歓声が響いた。

「見ろ！ 本当にあつたぞ」

彼は、野獣のようにツタを引き裂いていた。すると、一か所が力尽きるように落下した。そこでイムサが、「あつ」と言い、引き寄せられるように近づい

た。

それは、アベド一人分ほどの縦穴だった。縁には鑿のみの跡があり、中へ向かって、上へと少し傾斜している。黴、土埃、そして多足虫の類が、唐突に開かれた光によって大騒ぎを起こした。

イムサが息をのんだ。

「これ、目覚めの戦いの頃の出撃穴？」

オクルは、にやり笑った。縦穴の縁に残った蔦や雑草を取り除く。

「この穴から八十年前の兵が出ていったんだよ。灰紋と魔導師ロイヴェンボーグ軍に対する、最後の軍隊たちが」

クワーレンは、二度まばたきし、困ってオクルを見上げた。

「ロイヴェンボーグって、誰？」

オクルは、ひよいと眉を上げた。

「大戦争の火種になった魔導師だぜ？」イムサが、信じられん、と、クワーレンに詰め寄った。「エイネーをごちゃ混ぜにしたんだ。常識だろうがよ」

イムサは鼻を鳴らす。クワーレンは、物好きめ、と思いつつも、骸があるのではないかと恐る恐る首を伸ばした。

「販売が終わったら、探検しよう。なにかあるかもしれない」オクルが代わりに荷車を押して中に入った。

イムサも続く。「クワーレン、早く！」

クワーレンは、販売箱を持ち上げ、二人についていった。

骸はどこにもなかった。穴の中は、ただ暗く、砂埃と黴の匂いが充満していた。

前方で、イムサがオクルに話しかけている。

「なあ、どこで知ったんだよ？ 誰に教わったんだ？」

「歴史学のステラウル師が、前に俺に本を貸してくれたのさ。だが、その本にも、他の本と同様、この入り口のことは書いてなかった。このことを知ったのは偶然なんだ。俺だって、この目で見えるまで、まじであるとは思わなかった。まあ、聞けよ。もとはと言えば、カメイユの詩なんだ。ステラウル師から借りた本にさ、葉が挟まって、そこに書かれていたのが、カメイユの詩だったんだ。もちろん、戦争のこと書いたやつじゃないぜ。その時代には、カメイユはとつくに……」

「死んでるからな」イムサが言う。

「そう。けど、二重砦はすでにカメイユの時代にはあった。カメイユは、ここを題材にして詩を書いている。題名は『外縁からの星』。初期の作品で、抽象的な内容にほとんど注目されていなかったんだ。でも、そこにはこうある。

『二重の箱の中で、空の獣が舞う。

正面には祈りの口を

背後には蛇の目をもって。

血を与えよう、陽から来る者。

罰を与えよう、影から来る者。

地の底から星を見るとき、

君は手綱を、私は槍を持っていこう』……」

「だからなんなの？」クワーレンは、汗が冷やされ、悪寒を感じた。

「カメイユの時代には、魔法動物との戦が絶えなかったんだ。まだ魔導師たちは、魔法動物の対処法を確立できていなかったからね。ときおり、魔法動物たちは群れをなしてアベドを襲った。ここは、もともと魔法動物の島だったからさ。当時のアベドたちは、非常時に備え、ここを食糧庫とした。昔は屋根があったから、十分に使えたんだ。でも、非常の際の口をもう一つ作るにより、

ここを戦の本拠地として、出撃もできるようにした。入り口一つじゃ、敵に塞がれたらおしまいだからね。その非常口を、カメイユは、蛇の目と表現したと言われている。狡猾な蛇の縦長の瞳孔を、縦穴とかけたんだって」

「それを目覚めの戦いのときに利用したところまでは、理解できるさ。けど、なんでどの歴史書にも、建築本にも、この出撃穴のことは書かれていない？ 存在も疑われていたじゃないか」イムサは早口で言った。

「たぶん、まだ隠しておきたいんだと思うね。……まあ」

オクルは先を続けようとしたが、出口の明かりが見えてきた。背の高い彼と、手をつ込んで歩くイムサが、影になって浮かぶ。クワーレンは、光に目を細めた。

こちらへ膨らむ巨大な曲面が、そこにあった。彼らは動揺した。振り返ると、並行するもう一つの壁があった。どうやら、内部は二重の円の構造になっており、その間に、自分たちは出てきたようだった。

「観客席は、後ろみたいだ」

イムサは後ろの壁を仰ぎ見た。声援を含むざわめきが振ってくる。内側の壁は円を描いて競技場を支えているらしく、上部には、岩羊が超えないよう、高い柵が巡らされていた。

「これはすごい！ 無意識の壁って感じだな。なんにもない灰色の隙間！」

オクルは大きな手で拍手をし、音の響き具合を試した。

「僕は、観客席で拍手をしたいんだけど」呑気なオクルに、クワーレンは若干焦りを覚えた。

「わかってるよ。二百年前の獣の人も、八十年前の兵士も、ここから反撃に出たんだ。溝の中に何万人いたわけじゃないだろうし、きっと、競技場か観客席で待機してたはずだ。だから、ここへ降りる道が、ないわけがない」オクルは

のんびり言う。

「ぐるっと一周してみよう」遠くまで探していたイムサが、顔をこわばらせて戻ってきた。

「その顔は、狭いのが嫌いだな？」

オクルに言われ、イムサは、「さあな」と言つて、駆けていった。

階段はいつこうに見つからなかった。上からのざわめきは、姿が見えないせいで偽物のようだ。延々と続く灰色の通路に、彼らの思考はだんだんと鈍ってきた。自分たちは、はたしてどこからやってきたんだろうか。入口さえも消えてしまったようだ。

だから、頭一つ分高いところに突起状の階段を見つけたとき、彼らは歓声と同時に落胆の声を上げた。

「こんなの、どうやって上るっ？」

販売箱を下ろし、クワーレンは、飛び上がって階段に手を伸ばした。しかし、一段目をようやく手がかすめた程度だった。

「そうさ、そうさ。侵入されても上がれないようにしたかったんだ。梯子を使っていたんだろうな。敵が来たら、梯子を外せばいいわけで」

一番背の高いオクルもそう言つて飛び上がって試したが、しばらく掴んだ後、落ちてしまった。彼は顎を搔いた。イムサが言った。

「俺が台になって、二人が上るのは？ 荷物はそれから引き上げる」

「いや、待て。俺が台になったほうがいいだろう。肩車する。やってみよう」オクルが言い、彼らはすぐさま動いた。まず、販売箱を背負ったクワーレンがオクルの肩に乗り、石の段を掴んだ。販売箱の中のホルトがカチャカチャ言ったが、クワーレンは手に力を込め、猿のように確実に上つていった。

「落ちるんじゃないぞ！」下からオクルが言った。

次に、イムサが登る準備をした。見習い服を脱ぎ、それでペニヤッツの瓶を数本包むと、袖を前で縛って背負った。

「残りは、荷車と一緒に上げよう」

イムサは、甲虫のように、しっかりと確実に這いあがった。クワーレンは、彼の手をつかみ、引き上げた。

そこは、観客席の壁を一周する、わずかな足場だった。二人は小さく四つん這いになり、溝を見下ろした。クワーレンは眩暈がした。重心が傾けば、すぐさま落下するだろう。

「オクル！ お前はどうかやって上がる？」

イムサが叫んだ。

「縄を持ってきたくれ！ 荷物を引き上げよう。俺は後から行く！」オクルは両手を振った。「……こんなに簡単でいいのか？ あとからつけられた階段なのか？」と呟きながら。

クワーレンは、手と膝を使いながら、ゆっくりと後退した。すぐ後ろに観客席への扉があるが、石が山積みになっていた。二人は、背中の荷物を下ろした。

「これをどかして開けないと。俺たちはここで終わりだぞ」

イムサは歯を食いしばって、石の一つを動かした。石は見た目以上に重かった。ときに二人で唸って動かしながら、ようやく扉の全容が現れた。

扉は、血管を浮き上がらせて押す見習いによって、ざらざらと音を立てて向こうへ開いた。

その時、低い笛の音が、短く二回、長く一回鳴らされた。

クワーレンとイムサは振り返った。競技場の向こう側の門が開き、岩羊に乗った選手が入場してきていた。蹄の音が轟き、土ぼこりが舞う。観客席から歓声が上がリ、太鼓が鳴らされ、アベドたちの心臓を打った。開会式が始まるよ

うだ。

二人は、扉の向こうへ滑り込むように入った。あたりは静かだった。観客席の一部が崩壊しているせいで、使用禁止になっているからだ。まるで落石があったかのように放射状にへこみ、石積みの観客席は欠片の集まりになっていた。

「戦いの跡かな？」クワーレンは近づいた。

「これ、たぶん、五年前くらいに落ちた隕石跡だ。狐の尾流星群があつて、いくつかエイネーに落ちたんだ。獣の村と、薬の村に二つ。まだ直せていないんだな、なんでだろう」

クワーレンは、隕石の欠片が残っていないか探してみたが、どれが隕石なのかわからなかった。彼は、一つを失敬して隠しに入れた。

「クワーレン、先に販売して来いよ」イムサは、一番下の観客席で、見習い服の包みを降ろして言った。「俺、縄を探してくる」

「え、僕が縄を探すよ。もともと、これは君らの計画じゃないか」クワーレンは、見習い服を着なおすイムサを見た。

「いいや、縄は俺が探す。お前は先に稼ぎにいくんだ。早くはじめれば、完売もすぐだ。ささ、先にやっといてくれ」

「あ、お前！ 売り子になりたくないんだな！」

瞬間、イムサは駆け出した。

「俺は縄を探すんだー！」

クワーレンは追いかけたが、背中の販売箱が動きを邪魔した。イムサは、隕石跡への立ち入り禁止の縄をくぐり、点になっていた。

「……なんだよ、調子のいいやつめ」

イムサの置いていったペニヤッツ酒を拾ったが、クワーレンはそのまま座り込んだ。背中の販売箱を降ろし、ホルトを並べなおす。

競技場では、開会の歌が歌われていた。並ぶ選手たちの胴着は色とりどりだ。

北熊学舎ノールの白に、東梟学舎ホウムの緑。西穴熊学舎ラシヤの橙と、南鶴学舎ナウクの薄紅色。仕事人も参加しており、商の人の赤、狩りの人の紺、つくりの人の琥珀色など、各々の象徴色をまとっていた。

一人で販売をする気にはなれなかった。クワーレンは、重い腰を上げ、立ち入り禁止の鎖をくぐった。

「あら、引き出しを首から下げて、何をしているの？」

上から声が降ってきた。クワーレンは飛び上がった。

観客席の上の方から、少女の集団が降りてきていた。ラーリエ、アシエキ、他にも七、八人いる。大群になって騒ぐ小鳥たちがアベドになったらこんな感じだろう。それほど、彼女たちは意味もなく楽しそうにお喋りしていた。

「ずいぶたくさん飲むつもりなんだね」

並ぶホルトと、手にもつ酒瓶を眺めたアシエキが、けらけら笑って通り過ぎた。

「違うよ。販売だ。ええと……、秘密の味のペニヤッツ酒だよ」

「秘密の味！」

少女たちが駆け寄ってきた。「なんの、どんな味？」

「あいにくだけど、それは買った人にだけ教えられるんだ」クワーレンは、得意げになって言った。「一杯二十五ミルだよ。これは、『なかよしお日様味』っていうんだ」

「『なかよしお日様味』！」

ラーリエたちは、腹を抱えて笑った。

「あたし買うわ！ 一杯ちようだい」

一人の少女が、懷からミル硬貨を出した。大きな口が、楽しみで広がって

る。

「あんた、買うのっ？」ラーリエは、半分馬鹿にしたように笑った。

「だって、秘密の味なのよ！」

口の大きな少女は、はやく受け取ってと硬貨を揺らした。クワールレンは急いで受取り、瓶を開けると、ホルトに『なかよしお日様味』を注いだ。

「じゃ、うちにもちようだい！」

「私も一杯！」

「あたしも！」

クワールレンは、追われるようにして『なかよしお日様味』を注いだ。少女たちは、きやあきやあ騒いでいる。「ニルタも欲しい！」「あんた、金欠じゃん！」「ねえ、半分こしてよ？」

そんな中、クワールレンの視界に、硬貨の載った手が入った。

「あたしにも」

顔を上げると、アシエキだった。

「ちよつと。このお金、あの料理人のところにいくのよ。わかってんの？」ラーリエが小声で言う。

「でも、どんな味か知りたいし」アシエキは肩をすくめた。「まずかったら、まずいって言ってやればいい」

ラーリエは、せせら笑って、なるほど、と頷いた。

「でも、私はいらないわ」ラーリエはすまして言った。

クワールレンは、「これはオクルとイムサが作ったんだ」と言おうとしたが、少女たちは嵐のように騒々しく、それに、すぐに去っていった。

だが、手ごたえを感じたクワールレンは、本格的に観客席へ乗り出した。物品販売は少なくなかった。つくりの人や商の人が、旗や飲み物、飲み物をもらう

ための器、揚げ餅やウェイコレン、パカリ、角の被り物などを、クワーレンと同じように販売箱に入れて売っている。

だが、客を捕まえる前に、マウリンたちに出会った。彼女たちは、ウェイコレンの箱を持って、観客席の一番前を陣取っていた。

「さつき、イムサがここを走っていったわよ。あたしたちのこと、ぜんぜん気づかずにね」リリが、自分たちの前を腕を振って示した。

「売れ行きはどう？」エネーリスが販売箱を覗き込んだ。

「これからだよ」

「向こうの方が、仕事人たち、たくさんいるわよ」リリは、反対側の観客席を指した。「あっちに行けば、稼げるんじゃない？」

たしかに、リリの言う通りだった。クワーレンは、向こうに行きがてら、販売をすることにした。

「秘密の味の飲み物だよ！ 知りたきや飲んでつて！ 秘密の味だよ！」

クワーレンはそう言って練り歩いた。この売り文句は、気を引きつけたようだ。一人、二人、三人と、硬貨を渡す仕事人が次第に増えていく。

「よお。なかなか始まんねえじゃねえか」

瓶の残りが少なくなってきた頃、反対側からイムサがやって来て、縄でぐるぐる巻きにした追加のペニヤッツ酒を差し出した。

「オクルは？」

「そのうち正しい入口から来るだろうよ。猿のおっさんに顔を覚えられていなかったら」

「おい、ちょっと。一つくれや、それ」

観客席に座っていた男が、クワーレンをつついて販売箱を指した。クワーレンは硬貨を受け取り、イムサは『なかよしお日様味』をホルトに注いだ。

すると、あの髭男が競技場に現れた。

「アベドのみな様、長らくお待たせしました！ 汗と血と、岩羊の狂乱による砂埃を、たとえ吸い込む準備はいいですか？ 背骨の折れる音、岩羊の轟き、悲鳴、喝采、どれも歓迎！ さあ、真のアベドに近づけるのはどこのどいつか。はじめは可愛い見習い一年生！ 生きて帰ることはできるのか、あの黒太鼓が鳴らされたときが、彼らの生死をわけるときです。門の向こうに控えた岩羊の波、とくにご覧あれ！」

クワーレンは、ぞっとした。右手にある、観客席のはるか上。火を噴きだすかのような彫り物が、黒太鼓の後ろを飾っている。太鼓の側には、一人の屈強なアベドが、槌のような撥を持って立っていた。彼は、巨大な撥を大きく振りかぶった。

なぜチャルーを止めなかったのだろう、瞬間、クワーレンは思った。

撥を振った直後、遅れてびりびりと低音が響いた。クワーレンの腕の毛が逆立った。左手の門が開かれ、岩羊がなだれ込んでくる。まるで激流だ。太鼓の音に負けない、どろどろとした蹄の連続音。なびく青い毛。観客は歓声をあげて立ち上がった。岩羊は、一直線にこちらに向かってくる。

クワーレンは、白い胸当ての金髪アベド、チャルーの姿を認めた。

チャルーの岩羊は、はじめの障害物、坂の駆けあがりを流れるように終えた。棒高跳びを軽々超え、平均台へ向かう。何人かは、その間に道を逸れたり、互いにぶつかり合った。

チャルーは、その間に平均台を完走していく。およそ技術ではなく、勢いで

突っ走っている。

左の方でどよめきが上がった。一人の見習いが岩羊から転げ落ちた。小柄で白い胴着。北熊<sup>ノール</sup>の見習いだ。

クワーレンは、はっとした。急いで駆けつけた菓の人に起こされたその見習いは……。

「トルーヤっ！」

「階段あがりを終えた！」イムサが叫んだ。

トルーヤが転がり落ちている間に、チャルーは障害物の階段を駆け上がり、また一人抜かしていた。砂埃が無い、会場はくすみはじめる。土の匂いが立ち昇り、悲鳴と歓声がちや混ぜになる。岩羊の空色の体は、混沌の中を水のように突っ切っていく。しかし、クワーレンは、チャルーを見失った。

「どこにいった？」

「分かんねえ……」イムサも目を凝らす。

誰かが落羊した。悲鳴とざわめきが上がる。

そこで、クワーレンは肩を叩かれた。

「ちよつと？ ペニヤッツを買いたいんだが……」

クワーレンは、さっとその手を払った。「いまそこじゃないんだってば！」

競争は終盤にかかっていた。曲線の連鎖が、速度の出た岩羊の操作を混乱させる。うまく操らなければ、壁に激突してしまうのだ。何人かの選手がその末路をたどり、クワーレンは思わず顔を覆った。

向かいの観客席で、薄紅の旗を持った集団が歓声を上げていた。あれは南鶴<sup>ナウク</sup>学舎の見習いたちだ。先頭を走るのは、薄紅色の胴着の見習いだった。

クワーレンは、慌てての北熊ノールの胴着を探した。砂埃でどこも黄土に染まているが、北熊ノールの白い姿は見当たらない。

南鶴ナウクの選手は、最後の障害物、絶壁平均台にたどり着いた。壁へ直角に付けられた平均台を走るこの障害物は、最大の難所だった。体が擦れて思うように走れず、南鶴ナウクの選手は速度を落とし、少し進んでは止まるを繰り返していた。

「北熊ノールはみんな転げ落ちたのかよ！」イムサは目を剥いて会場を見渡した。

緑の東臈学舎ホウリム、橙の西穴熊学舎ラシヤの選手たちが、続々と絶壁平均台にたどり着く。白の北熊学舎ノールの選手は、一人もいない。

すると、背後で落胆の混じった笑いが上がった。北熊学舎ノールの上級生たちが、いつの間にか集まって観戦していた。

「まあ、一年はこんなもんだ」一人が言った。

風で流されていく砂埃の中、落羊して失格となった者たちが退場していく。足を引きずっていたり、緊急手当のために薬の人に囲まれていたり。

クワーレンはそのとき、友人の死の感覚が鮮明に迫ってきた。朝、嘘でも選手着を褒めればよかったのに、なぜ言わなかったのだろう……。

南鶴ナウクの選手が、一番に平均台を下りたようだ。砂埃でよく見えないが、向かいにいる南鶴ナウクの見習いの悲鳴に近い歓声が、それを物語っていた。

砂埃の中から、薄紅色のアベドが割って現れた。こちら側の決勝線へ、死に物狂いで駆けてくる。背後の先輩たちからため息が漏れた。

「次の学年に期待しようぜ」彼らは背を向けた。

その時、南鶴ナウクの岩羊が出現したところより数段高い場所から、白い胴着のアベドが飛び出した。

北熊ノールの見習いたちから、割れんばかりの歓声が上がった。先輩たちは戻ってきて、クワールンたちの肩を掴み、咆哮した。

その岩羊は、かなりの高さを飛び下り、南鶴ナウクの岩羊より数歩前に着地した。両者は最後の直線を猛烈な勢いで駆けた。

クワールンの頭は、興奮で爆発した。

砂埃が流れ、絶壁平均台の全貌が現れる。どうやら、あの岩羊は、最上段を歩いたようだ。砂埃の影の中で。

決勝線が近づく。

選手の顔も近づいてくる。

「いけえ、北熊ノール！」後ろの上級生たちが口々に叫んだ。「やっちまえー！」

クワールンとイムサは吠えた。

「チャルーっ！」

チャルーは、手綱を握っている感覚がなかった。岩羊の蹄の音が鼓膜を刺激する。その音は、自分の鼓動と共鳴していた。

目の前に、白く開けた大地が見える。自分はそのを駆けている。飛んでいる。岩羊の感じる地面、風、熱気が、自分のもののように感じる。

誰かの声がひときわ大きく耳に届いた。俺の名前か？　だが、誰もいないようだ。前にも後ろにも隣にも。誰が呼んでいるのだろうか？

岩羊の足は、自分の足だった。こいつの呼吸は、自分の呼吸だった。

決勝線のその先が、ぐらついて見える。

（一位だ）

そう思った。

刹那、体が宙に浮いた。世界がひっくり返り、手綱が手から離れる。背に衝撃が走り、肺からすべての空気が抜けた。目玉が裏を向き、チャルーは気を失った。

見習いの甲高い喚き声が、頭痛を誘発した。知らない男の音がする。そういつは、チャルーの体の下に腕を回し、支えているようだった。

「起きろ、寝坊助。なあ、知っているか？ 剥がれた竜の鱗は、匙おきに使っているらしい。贅沢だよな、獣の人は」

朦朧とすると、目を開けると、男はまったく別のことを言っていた。

「聞こえるか、チャルー？ 聞こえていたら、まばたきしろ」

チャルーは、頷こうと思ったが、背中が痛くてできなかった。だから、言われた通り、まばたきを一度した。

「よし、よかった。すぐに救護室へ連れて行くからな」

「……俺、……結果は……」

「それより手当だ。大丈夫、お前はよくやった。背中を打っているから、無理に動くんじゃないぞ」

「ごうごうと、耳の中で血の流れる音がする。眠りに落ちるように、また気を失いそうになる。そこへ、平手打ちのごとく声が飛んできた。

「生きてた、生きてた！」

クワーレンだ。リリも来ているらしい。彼女は「ああ、影の人、影の人！」と叫んでいた。小さく泣いているのはエネーリスだろうか。

「ほうら、見ろ。雑草みたいな生命力さ」反対側でオクルの声がした。

「……ああ、死んだかと……」イムサが、がくつと鈍い音を立てて膝を折る。

「骨折してるの？」マウリンの影が、覗き込もうと迫ってきた。

「ほら、みんな散って。こいつを救護室に運ぶから」

支える菓の人は手を振った。足元から担架がやって来る。

「お前は認められたのさ。あれは、そうそうできる芸当じゃない。よくやったな」静かに菓の人は言い、柔らかな笑みを浮かべた。

それが、あまりにも最初の育ての者に似ていて、チャルーは堰を切ったように泣きだした。

「……ダーング」

意識がはっきりし、ようやく物事を理解できたのは、救護用天幕の寝台に横たわり、木製の賞杯を目にした時だった。岩羊の角のように黒光りする取っ手、正面には岩羊の顔が彫られ、空色の硝子玉が目の部分に埋め込まれている。蜜のように艶やかに磨かれた台座には、『特別賞』とあった。マウリンが賞杯を触ろうと手を伸ばしている。それを、エネーリスがぴしやりと叩いた。

「決勝線の手前で、君は一瞬、気が緩んだのではないか？」

チャルーの足元に腰掛けるベロイユ師は、脱力した長い腕を前で交差させて言った。面長な師の顔には、安堵と誇りがあった。

優勝杯は南鶴ナウクが獲得したと、ベロイユ師は初めに言った。チャルーが訊ねたからだ。二位に東梟ホウム、三位に西穴熊ラシヤが続いたそうだ。北熊ノールは決勝線の手前で落羊したらしい。しかし、絶壁平均台での動きが評価され、特別賞が授けられたという次第だ。

「……さあ、どうなんすかね」

エネーリスがマウリンを罰したのを見て、チャルーは一応満足し、ベロイユ師に肩をすくめた。

ベロイユ師は面白そうに、指を一本立てた。

「俺、一位かも。とか思わなかったか？」

チャルーは閉口した。師は軽快に膝を叩いた。

「そうだろうと思った。岩羊は君の気の緩みを察知して、走ることをやめたのさ。もう走らなくていい、とね。それで急に止まったものだから、君は前に投げ飛ばされてしまったんだよ」

「あああっ！」

チャルーは頭を掻きむしりたかったが、全身が痛く、目をつむることしかできなかった。底知れない悔しさがこみあげ、体に力が入る。痛みがそれに抗議したが、そうすることでしか自分を保つことができなかった。

そこへ、クワーレンとイムサ、オクルが天幕に入ってきた。クワーレンは、首から販売箱を下げ、後ろで手を組んでいる。イムサは空の瓶を、オクルは硬貨の入った壺をじゃらじゃら鳴らしていた。

「調子はどうだい、金の英雄」

オクルが言って、チャルーの横に座った。「外では誰もが、君の武勇伝を話しているぞ」

「決勝戦の手前で転んだのか？」

「うん、それも長く語り継がれるだろう。だが、あれほど岩羊を乗りこなすやつが北熊ノールにいる、ということを知らしめたのが、一番の功績なんだ」

「やめろ、オクル。こいつ、いまは朦朧モウロウとしているけど、正氣に戻ればすぐに調子に乗るぞ」

イムサが割り込んで言った。鼻を鳴らし、卓に空瓶を置く。

「そっちは売れたのかよ？」チャルーは訊ねた。

「完売だよ。君があのとんでもないことをしてから、飛ぶように売れたんだ」クワーレンは隠し持っていたものを見せた。「そして、これは君の分」

一瓶のペニヤツツ酒を、クワーレンはチャルーに渡した。

「これは、薄めていない、本物のペニヤツツ酒だぜ？」

オクルはこっそりチャルーに言った。「会場外の移動販売店で買ってきた。

俺たちの売り上げで」彼は、硬貨の入った壺をまた鳴らした。

「さて、私は仕事に戻ろう。上級生たちの士気をあげてこなくては。ペニヤツツ酒は、君たちでゆっくり飲みなさい」

ベロイユ師は立ち上がった。「チャルー、君は来年どうする？ もしその気があるなら、選手枠をとっておこう」

チャルーは、ベロイユ師の言葉を理解するのに時間がかかった。

「来年も出るかって聞いているのよ」オクルの反対側にいたりりが、チャルーの腕を叩いた。

「え、俺？ 来年？ ……ああ、はい、やります、やります」彼はようやく頷いた。「やります！」

ベロイユ師は満足げに頷き、天幕を出ていった。見習いたちは、チャルーを称えて、ペニヤツツ酒で乾杯をした。

しかし、一息つくと、イムサが言った。

「『なかよしお日様味』の方が、面白い味してたな」

一口も飲んでいなかったチャル―は、散々彼をのしつた。